

第 22 話 源氏の滅亡

頼朝は政治家としては偉^{えら}かったが、人を妬^{ねた}み疑^う心^が深く、功^{こう}労^{らう}のある弟^あや臣^{しん}下^げらをむやみに殺^{ころ}したので、自然^{しぜん}と源^{げん}氏^しの勢^{せい}力^{りき}を弱^よめる事^{こと}となっ^て、源^{げん}氏^しは僅^{わずか}かに三^{さん}代^{だい}で亡^なびた。

さいぎしん ふか よりとも
猜疑心の深い頼朝

頼朝^{よりとも}が武将^{へいてい}としても偉^{えら}く、政治家^たとしても偉^{えら}かったことは、全国^{ぜんこく}を平定^{へいてい}して幕府^{まくふ}を鎌倉^{かまくら}に開^{ひら}き、巧^{たく}みに国内^{こく内}の武士^{ぶし}を統^すべて、事^{こと}なく天下^{てんか}を治^{おさ}めたのでもよく分かるが、惜^おしいこと^{こと}には、人^{ひと}を妬^{ねた}み、疑^う心^こが深^{ふか}く、梶原景時^{かじわらかげとき}の讒言^{ざんげん}などに惑^{まど}わされて、先^{さき}には弟^あの義経^{よしつね}を殺^{ころ}したが、後^{のりより}にはまた範頼^{のりより}をも殺^{ころ}した。臣^{しん}下^げの中^{ちゆう}では、殊^{こと}に功^{こう}労^{らう}のあつた上総介^{かづさのすけひろつね}広常^{ひろつね}を疑^うつてこれ^こを殺^{ころ}し、後^{のりより}になつて何^{なに}の罪^{つみ}もなかつたのを知^しつて後悔^{こうかい}したこと^{こと}などもある。

ひろつね
功臣広常を殺す

上総介^{かづさのすけひろつね}広常^{ひろつね}は、初^{はじめて}め頼朝^{よりとも}が石橋山^{いしばしやま}で敗^あれて安房^{あわ}に逃^{のが}れた時^{とき}に、20,000 の大軍^{ひき}を率^みいて身方^{みかた}になつた人^{ひと}で、頼朝^{よりとも}の軍^{ぐん}が大^{おほ}いに振^ふるうよ^うになつたのは、彼^あの兵^{へい}を併^あせてから^の事^{こと}でした。富士川^{ふじがわ}の対戦^{たいせん}の後^{のち}に、頼朝^{よりとも}が直^すぐに平家^{せいのけ}の後^{のち}を追^おつて攻^{せめ}上^{のぼ}ろうとす^{ると}、彼^あは先^まづ退^{しりぞ}いて東国^{とうこく}を定^{さだ}めるよ^うにと勸^{すす}めて、後^{のち}に幕府^{まくふ}を鎌倉^{かまくら}に開^{ひら}く基^{もと}を置^おかせました。広常^{ひろつね}はその後^{のち}も常陸^{ひたち}の佐竹氏^{さたけ}を滅^めぼしたり非^ひ常^{じょう}に功^{こう}労^{らう}が多^{おほ}かつたが、頼朝^{よりとも}は、彼^あが身方^{みかた}につくのが他^{ほか}の武士^{ぶし}より^も少^{すく}し遅^{おそ}かつたのと、馬^{うま}に乗^{のり}つたま^まで頼朝^{よりとも}の前^{まへ}に出^いるよ^うな無^ぶ礼^{れい}な行^いひがあつたので、これ^こを疑^うつて、梶原景時^{かじわらかげとき}に命^{いのち}じて広常^{ひろつね}とその子^この良常^{よしつね}とを殺^{ころ}させたので^す。

ところが、後^{のち}になつて、広常^{ひろつね}が嘗^{かづさ}て上総^いの一^{いち}宮^{みや}に鎧^{よろい}を納^{おさ}めたとい^うことを聞^きいて、さてこそ謀反^{むほん}の成功^{せいこう}を祈^{いの}つたのであろうと、これ^こを取り寄^よせて鎧櫃^{よろいひつ}を開^{ひら}いて見^みると、添^そえてあつた願文^{がんもん}には、この鎧^{よろい}は頼朝^{よりとも}公^{こう}の武運^{ぶうん}長^{ちやう}久^{きゆう}を祈^{いの}る為^{ため}に納^{おさ}めるとい^う意味^{いみ}が書^かいてあつた。頼朝^{よりとも}は始^{はじ}めて自^{おの}分の疑^{うたが}い^が根^ねのないものであつたのを知^しつて、功臣^{こうしん}を殺^{ころ}したことを後悔^{こうかい}し、牢^{ろう}に入れてあつた広常^{ひろつね}の二^{ふた}人^{にん}の弟^あを赦^{ゆる}したので^す。

まきがり
富士の巻狩

範頼^{のりより}をも殺^{ころ}した理^り由^ゆなども、無^む理^りに疑^うい^ををかけた^{だけ}のこ^とで、その実証^{じっしょう}とい^つては何^{なに}もなかつたので^す。そのも^とともい^うべきものは、富士^{まきが}の巻狩^{まきが}りから起^おこつたので、先^まづその事^{こと}から簡^{かん}単^{たん}に述^のべて見^みる。

前^{まへ}にもい^つつたよ^うに、頼朝^{よりとも}は建久^{すその}4年^{ねん}5月^{げつ}、富士^{ふじ}の裾野^{すそ}で大^{おほ}仕掛^{じか}けの巻狩^{まきが}りをした^が、その時^{とき}、鎌倉^{かまくら}には弟^あの範頼^{のりより}を留守居^{るすい}に留^{とど}め、自^{おの}分^{ぶん}は子^この頼家^{よりいえ}を始^{はじ}めと^{して}、数^{あまた}多^{しやうし}の将士^{しやうし}を率^すいて裾野^{すそ}に出^いかけた。狩^{かり}とはい^つつても、往復^{おうふく}の日数^{にっすう}を加^おえ^{ると}凡^{およ}そ1ヶ月^{かげつ}もか^かかるので、将士^{しやうし}は皆^{みな}、裾野^{すそ}に飯屋^{かりや}を設^{もう}けてその中^{ちゆう}

第21話 武家政治の始

ねお
に寝起きすることになっていた。ところが8日に始まった巻狩りがそろそろ終わりに近づいた28日の
やはん かたきう とつぼつ そがのじゅうろうすけなり ごろうときむね
夜半に、有名な曾我兄弟の敵討ちという大事件が突発しました。曾我十郎佑成と弟の五郎時致の2人
しの い ぼうふ かたき くどうさ えものじょうすけつね う
が仮屋に忍び入って、亡父の敵の工藤左衛門尉祐経を討ったのです。

そがの かたきうち 曾我兄弟の敵討

そもそもこの兄弟は河津祐泰という者の子ですが、この時から17年前、佑成が5才で一萬といい、
ときむね はこおう すけやす すけつね そがの
時致が3歳で管王といった時に、父の祐泰は祐経の為に殺されたのです。2人は母に連れられて曾我
すけのぶ せわ そがの な の せいじん
佑信という者の世話を受けることになったので曾我氏を名乗っていたが、成人するにつれていかにもして
かたき ぶげい ね じせつ とうらい
父の敵を討とうと思ひ、常に武芸を練ってその時節の到来を待っていました。

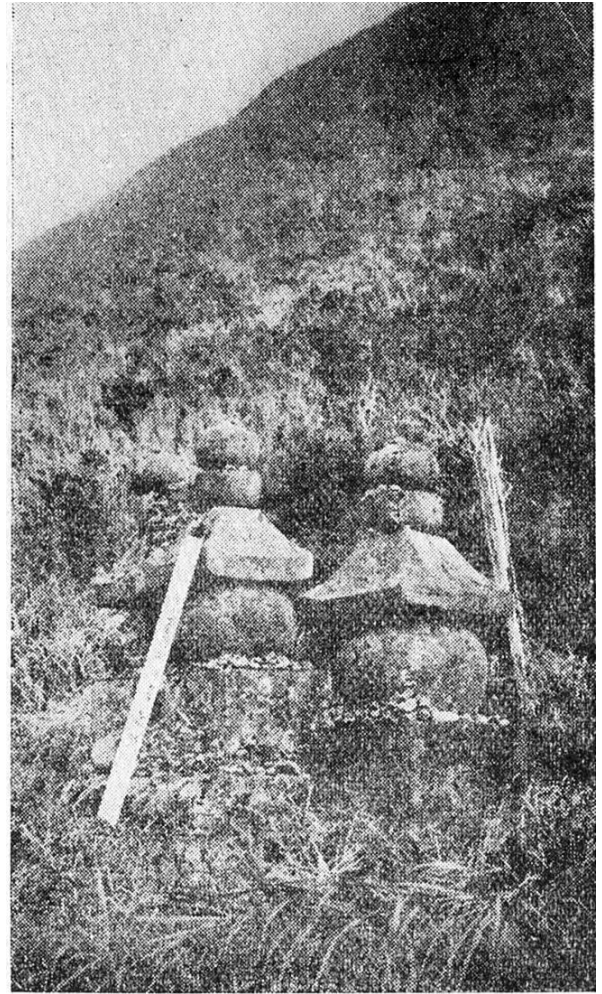
それが漸くこの時になって本望を遂げましたが、
とのい たちま かり
宿直の者がこれを聞きつけて飛び出したので、忽ち狩
ば つい すけなり に たんの し
場は上へ下への大騒ぎとなり、遂に兄の佑成は仁田四
ろうただつね ときむね
郎忠常の手にかかって殺された。弟の時致はこれを
よりとも じん や きり
見ると、「この上は頼朝をも」と考えて、その陣屋へ斬
こ じょそう ゆだん と き
込んだが、女装した者に油断して捕らえられて、後に斬
すけなり ときむね
られた。佑成は時に22才、時致は20才でした。

よりとも のりより 頼朝、弟範頼を憎む

この騒ぎが鎌倉に間違っただけで伝えられて、頼朝も殺
さわ まちが よりとも
されたという噂が立った。頼朝の妻の政子がこれを
うわさ よりとも まさこ
聞いて大いに悲しんだので、範頼はこれを慰める為
のりより なぐさ
に、「たとえ兄上に御大事がありましても、範頼が居り
おんだい じ のりより お
ますから鎌倉は大丈夫です。ご安心なさい」と言った。
だいじょうぶ
後に頼朝がこれを聞いて、よくもそんな出過ぎた事を
よりとも です
範頼はいったものだと思ひ始めた時に、たまたま範頼
のりより にく はじ のりより
が謀反を企てていると讒した者があり、頼朝は大いに
むほん くわだ ざん よりとも おお
怒って、「よしその儀ならば、直ぐに兵を遣わして討取
いか ぎ す へい つか うちと
れ」といった。

のりより ふたごころ ちか おおえひろもと
範頼はこれを聞くと大いに驚き、自分に二心などは決してないという誓いの書面を書いて、大江広元
へ さしだ みなものりより よりとも のりより
の手を経て差出した。ところが、その書面の中に、「源範頼」と書いてあるのを見て、頼朝は、「範頼
は弟ではあるが、他家の養子になったものだ。然るに、源の姓を用いるとは当家の一族と思っている
たけ ようし しか みなもと せいもち どうけ
のか？ 実に怪しからん」と、全く謂れのない理屈をつけて、いよいよ憎み疑って赦そうとしなかつ
じつ け まった いわれ りくつ にく うたが ゆる
たのです。

のりより 頼朝の最後



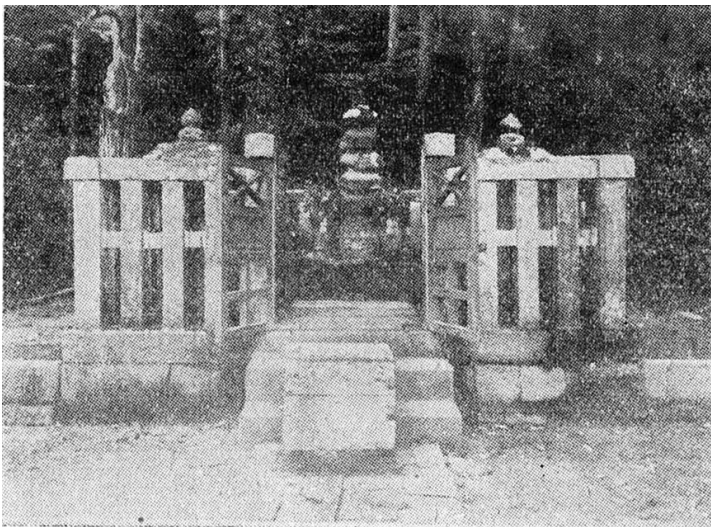
曾我兄弟の墓
(箱根山中の二子山の麓にある)

範頼は義経とは違って、全く反抗する気などのない人でしたので、これは定めて讒した者があるのだろうが、誠に情けないことだと、独りで歯を食いしばって口惜しがっていた。家来の当麻太郎という者が、この範頼の心痛を見兼ねて、早く頼朝の本当の気持ちを知りたいと思い、夜、頼朝の寝室の床下に忍び入って、息を潜めて様子を窺っていると、忽ちその気配を頼朝に覺られて、ついに捕らえられた。太郎はその訳を申し述べたが、頼朝は範頼が自分を殺させる為に忍び込ませたに違いないと、太郎を殺し、範頼を伊豆の修善寺の修禅寺に押込めました。

範頼の家来共が、頼朝のあまりに無情な処置を怨んで反抗しようとする、頼朝は梶原景時らに命じてこれを討たせた上に、更に景時の言葉を用いて、景時らを遣わして遽かに範頼を攻めさせた。範頼は不意に攻寄せられた為に、鎧を着る暇もなく、弓を射てこれを防いだ、ついに矢種が尽きると、寺に火を放って自殺した。その墓は今も修善寺に在ります。

頼朝の薨去

建久 9 年正月、後鳥羽天皇は御位を御子第 83 代土御門天皇にお譲りになって上皇となられ、院政を開かせられた。その年の 12 月に、頼朝は家来の稲毛三郎重成が架けた相模川の橋の落成式に臨んで、その帰りの路で馬から落ちたが、これがもとで病気に罹ってその翌年の正月 13 日について 53 才で薨じた。



頼朝の墓

その墓は今も鎌倉の大倉山の中腹にある。墓石の高さは五六尺で、石の玉垣で囲んである外には何一つ目を惹くものもない。誠に粗末なもので、これが初めて幕府を開いて武家政治を始めた人の墓だとは思っても寄らないほどです。而も伝えに依ると、この墓は今から 150 年ほど前の安永年間に立て替えられたもので、その前は、もっと小さな、3 尺ばかりの五輪の石塔であったと

鎌倉 大倉山 頼朝の墓

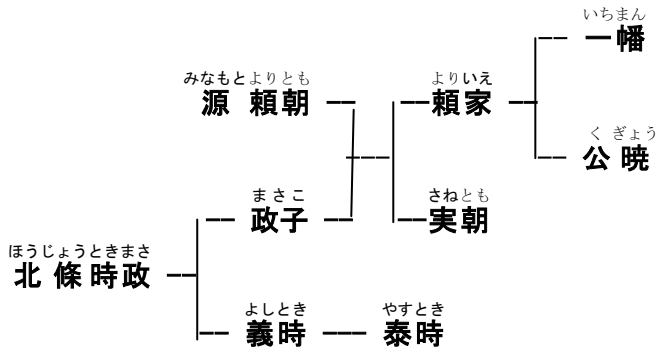
いうことであります。これは、一面から見れば、いかに鎌倉時代が質素であったか、節儉を奨励した頼朝の命令がいかによく行われたかを知る例にもなるといえます。

頼朝と義経に対する世人の心得

しかし、墓はいかに小さく見すばらしくても、その人物に徳があり人望があったならば、常に参詣する者が多く、香華も絶えないでしょうが、頼朝の墓は徒に苔が蒸して蕪かづらが這いまわっています。彼は、前にもいったように、武将としても政治家としても偉かったが、幼少の時から流人となって他人の中で成長した為にか邪推の心が深く、手柄のある弟や臣下らを疑ったり妬んだりして、むやみに殺したので、世人の憎みを受けたのでしょう。今日でもなお、彼の墓を好奇心から見に行く者はあっても、参詣に行く者などは全くないという有様です。

第 21 話 武家政治の始

これを衣川で自殺した義経を惜しむの余り、実は義経はこの時には死なないで北海道から満州に渡り、清国皇室の先祖になったなどという噂をまで立てて、無理にも義経を生かそうとした古人の心持と比べて見たならば、いかにわが国人が昔から正義を愛して、人情に外れた非道を憎んだかが分かります。



尼将軍政子

さて頼朝が薨じると、長子の頼家が十八才で家を継いだがつ、年も若く、生まれつき利口でもなかったのので、幕府の政治は、母の政子が北條時政を始め、北條義時、大江広元、三善康信、和田義盛、梶原景時らと相談して執行うことにした。政子は、前にも言ったように、北條時政の娘で、義時の姉です。女にしては稀にみるしっかりした、物の分かった人です。

嘗て富士の巻狩の時に、12才の頼家が鹿を射止めたのを頼朝が喜んで、わざわざ梶原景高を使いとして鎌倉の政子にこれを知らせてやると、「将軍の嫡子ともあろうものが、野山の鹿や鳥を射止めたどて何が珍しい。わざわざ使いなど出さなくともよかろうに」といって使いの景高を驚かした事がある。それくらいですから、今度、将軍に代わって政治を見るようになって、てきぱきと取裁いて、よく幕府の威勢を保った。政子は頼朝が薨じた後は、髪を剃って尼になっていたのので、世に尼将軍と呼ばれました。

幕府の根柢ゆらぐ

とはいえ、鎌倉の幕府はもともと頼朝が中心に出来たもので、その人格の力でよく諸将士を統率していたのですから、今、中心がなくなった後に、頼朝以上の人物か、少なくともそれと同等の人物が現われればともかく、さもない限りは、なんらかの動揺が起こらないわけには行かなかった。諸将士が申合せて、梶原景時を排斥したのなどはその一つです。

景時は元は平家に属していたが、石橋山の戦いで頼朝の命を救ったので、その後に頼朝の威勢が盛んなのを見て降参して来てからは、大いに頼朝の信任を受けた。武芸にも学問にも長じ、その上、和歌なども巧みでしたが、悪い事には、自分の気に合わない者があると無い罪をこしらえてまでも頼朝に讒言をして、これを殺させて喜ぶという癖があった。義経や範頼や上総介広常が彼のために殺されるようになったことは既に述べたが、その外にも、彼のために命を落とした者が少なくなかったのので、頼朝の家来の中には、景時を忌み憎んでいる者が多かった。しかし、如何にせん、頼朝が命の親として厚く彼を信任していたので、うっかり手を出すことも出来なかった。

第21話 武家政治の始

かじわらかげとき あくじ しょしようし うった
梶原景時の悪事を諸将士が訴える

ところが、頼朝が薨じて頼家の時代になってからも、景時のこの癖は止まなかった。彼は先づ安達景盛が謀反しようとしているとあって、頼家に讒したので、頼家は怒って、その家来らを遣って景盛を討たせようとした。この時には、母の政子が、景盛に罪の無いのを知っていたので、固く頼家を諫めてその非法を思い留らせた。

すると、間もなくまた、景時は結城朝光に謀反の心があるという、頼家に讒したので、朝光はこれを聞くと驚いて、親友の三浦義村の許に駆付けて、どうしたらよかろうかと相談した。義村は既に久しく前から景時の讒言で多くの者が命を失うのを歎いていたので、同じく景時を憎んでいる他の諸将と共に鶴岡八幡宮の回廊に集まって、相談して、景時の悪事を頼家に訴える事にした。この時、集まった者は六十六人で、それが皆その訴状に名前をつらねたのを見ても、いかに景時が多くの人に憎まれていたかが分かります。

かげとき さいご
景時の最後

頼家はその訴状を景時に示すと、さすがの景時も一言の言訳も出来ずに、一族を引連れて自分の領地である相模の一宮に退いた。しかし、彼はそのまま黙って引込んでいたような男ではなかった。密かに甲斐源氏の武田有義を戴いて鎌倉幕府に反抗しようという計画を立て、それには西国に赴いて九州方面の将士と供に兵を挙げることにしようと、正治2年正月20日、一族郎党30余人を引連れて一宮を出発し、京都を指して駿河の清見ヶ関の附近まで行ったが、たまたまその土地の武士らと衝突して、ついに一族悉く敗れて死んだ。頼朝が薨じてからちょうど一年の後でした。思えば、積もる悪事の報いが来て、屍を路傍に曝すようなことにもなったのでしょうが、嘗ては鎌倉中の将士に恐れられた梶原としては、あまりに無慙な最後であったともいえます。

びょうじゃく
病弱な二代將軍

景時が殺された翌々年の7月、頼家は征夷大將軍に任ぜられたが、これは、頼朝の子だからなただけの事であり、もとよりその器量があった訳ではなかったもので、自分は相変わらずわが侘な、したい放題の事をして暮らしていた。あまりに善くない行いをする時には、母の政子が厳しく諫めたが、頼家は一向に改めようとはしなかった。

ところが、その翌年、頼家は俄かに病気に罹って、迎も直りそうにも見えなかったもので、母の政子は、その父の時政と相談して、日本全国を二分し、東28ヶ国の地頭職と天下の総守護職とを頼家の子の一幡(時に6才)に譲り、西の38ヶ国の地頭職を頼家の弟の千幡(時に12才、後の実朝)に譲らせることにした。一幡の母は比企能員の娘でしたので、一幡に頼家の後を継がせて將軍とすると、比企氏の勢力が盛んになって北條氏の勢力が衰える虞があったからです。

比企能員はこれを聞いて大いに憤った。彼は密かに病床の頼家と謀って、北條氏を滅ぼそうと企てたが、忽ちその謀が洩れたので、却って時政に殺された。比企氏の一族は一幡を擁して起

第21話 武家政治の始

ったが、これも ^{ことごと} 悉く滅ぼされて、その戦いの中で ^{いちまん むざん と} 一幡も無慙な死を遂げた。

よりいえ さいご 頼家の最後

^{よりいえ} 頼家の病気はその後に ^よ 快くなつたが、^{まさこ すで はい} 政子は既に彼を廃して弟の ^{さねとも} 実朝を立てることにしていたので、無理に坊さんにして伊豆の修善寺に移した。 ^{よりいえ およ} 頼家はそこで凡そ1年の間、まるで押込み同様に ^{おしこ どうよう} されて淋しい月日を送っていたが、その翌年の7月18日、^{ふろば} 風呂場にいる時に、^{ときまさ めい} 時政の命を受けて密かに ^{ひそ きかい} 機会を窺っていた者のために ^さ 刺し殺された。

まさこ ひとがら 政子の人柄

この事を ^{つ し} 告げ知らされた時の ^{まさこ} 政子の手紙として伝えられているものに依ると、この時、^{まさこ} 政子はびくりともせず、こういう事は ^{なら} 世の慣いで、いくらでもある事だから驚くには及ばない。 こういう事があるからこそ人の心もよくなるのだ、といっている。

そのあとで、母としての ^{なげ ひとお} 歎きは一通りではない、どんなにしても ^{なぐさめ} 慰められないとは思う、ともいってはいるが、自分の ^{そ ふ} 長子が現在の祖父に殺されたのを、世にありふれた事かのように ^{へいぜん} 平然としているところは、^{あましようぐん} そこが尼将軍ともいわれるほどに偉かったのだともいえるでしょうが、又、あまりに ^{きつよす} 気強過ぎて、^{ふじん} 婦人としての ^{びとく か} 美德に欠けるところがないでもないともいわれよう。

さねとも とくまさ 三代将軍実朝と執権時政

^{よりいえ はい} 頼家が廃されると ^{さねとも} 実朝は ^{にん} 将軍に任ぜられたが、まだ12才の少年でしたから、政治はやはり母の ^{まさこ} 政子が ^{ときまさ} 時政らと相談して行っていた。 その頃、^{ときまさ すで しっけん} 時政は既に執権 — ^{たす いっさい} 将軍を輔けて一切の政治を取り締まる役 — となつて、その勢いは非常に盛んでしたが、彼はこれにも ^{まんぞく} なお満足せず、^{さねとも はい} 諸軍の ^{実朝} を廃して自分の娘の ^{むこ ひらがともまさ か} 婿の ^{ひそ いんぼう} 平賀朝雅を代わり立てようと密かに ^{ともまさ とくまさ ごさい う} 陰謀をめぐらした。 ^{朝雅} の妻は ^{ときまさ} 時政の後妻が産んだ娘で、^{まさこ よしとき} 政子や ^{よしとき} 義時とはその母親がちがっていたのです。 ^{ときまさ} それで、^{ときまさ} 時政はこの後妻のいう事を聴いて、その頃に彼の ^{やしき さねとも} 邸にいた ^{実朝} を殺そうとしたのでした。 ^{まさこ} しかし、^{まさこ} 政子が早くもこれを知って ^{みうらよしむら} 驚き、^{三浦} 義村、^{ゆうきともみつ} 結城朝光らに命じて、^{さねとも とくまさ} 実朝を ^{よしとき} 時政の邸から ^{よしとき} 義時の邸に移させた上に、^{めいれい しょう} 将軍の命令と称して、^{ときまさ} 時政を攻める用意をするように見せかけたので、^{ときまさ} 時政が集めた兵士は皆去つて ^{よしとき} 義時の邸に ^{おもむ} 赴いて ^{さねとも} 実朝を守った。

よしとき 義時が執権となる

そこで、^{ときまさ} 時政は申し訳のために髪を剃つて坊さんとなり、伊豆の ^{いんきよ} 北條に隠居して、再び政治には関係しない事になつたので、子の ^{よしとき か} 義時が代わつて ^{ときまさ} 執権となつた。 ^{ときまさ} 時政は10年の後に78才で伊豆で亡くなつた。

そうめい さねとも 聡明な実朝

さて ^{よしとき} 義時が執権になつてから6年目に、^{つちみかど} 土御門天皇は御在位13年で、まだお年は16才でしたが、御位を弟の ^{じゅんとく ゆづ} 第84代 ^{さねとも} 順徳天皇に譲つて上皇となられた。 この時、^{よりいえ} 実朝は19才で、兄の ^{よりいえ} 頼家とちがって、^{そうめい} 中々 ^{き ばんじ よしとき} 聡明でもあつたが、幕府の政治は既に全く北條氏の手 ^き に帰して、^{ばんじ よしとき} 万事は ^{よしとき} 義時の心のままになっていた。

第21話 武家政治の始

しんちゅう よしとき まま たの
心中では義時のわが俣を憎んでいたのですが、といっても、頼みとすべき一族といってもなく、
力とすべき家来とても別になかったので、何事も諦めて、一向に世の中の事などは知らないもののように、
す わか よ ひそ ころ なぐさ くらい やく いただ
自分は好きな和歌を詠んで密かに心を慰めたり、又、朝廷から高い位や役を戴いて、それを楽しみに
していました。

実朝の和歌

かじん めいじん かつ ごと ば たてまつ
歌人として彼は中々の名人で、嘗て後鳥羽上皇に奉った歌に、

山はさけ海はあせなん世なりとも 君に二心われあらめやも

というのがあります。「たとえ山は裂け、海は涸れるような世になっても、陛下にお背き申す心はわたくしにはありません」という意味で、彼がいかに皇室に対して深い尊敬の心を持っていたかが分かる。又、
ある時、大雨が降り続いて、大水が出た時に、

時により過ぐれば民の歎きなり 八大龍王雨やめたまえ

と歌って、民の為に雨の欠むように祈ったこともある。彼の歌は気品が高く、京都の人達のととは違った
ぶしょう おお ちょうし きんかい
武将らしい雄々しい調子を持っていた。彼の歌を集めたものを『金塊和歌集』といって今も伝わっています。今その1,2を挙げると、

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や 沖の小島に波のよる見ゆ
おおうみ いそ よ なみ くだ さ ち
大海の磯もとどろに寄る波の われて砕けて裂けて散るかも
ものものふの矢並つくらふ籠手の上に あられ な す はら
霰たばしる那須のしの原

実朝の官位

さねとも かんい
実朝の父の頼朝は、藤原氏や平家が衰えたり亡んだりしたのは、出世に任せて、漫りに高い役や位
を望んで驕りに耽ったのがもとだと考えていたので、自分は、朝廷でそれらを下し賜ろうとしても、なる
べく辞退してお受けしなかった。実朝はこれに反して、自分から願ってまで高い官位に上ろうとした。
彼は12才の時に従五位下に叙し、征夷大將軍に任ぜられ、尋いで左兵衛佐となつてから、年毎に官も昇
り、位も進んで、22才の時には正二位に叙し、25才の時には権中納言に任ぜられ、左近衛中將を兼ね
た。

こういう進み方はあまり例のない事でもあったし、第一、頼朝の意思にも反していたので、ある時に、
おおえひろもと さねとも べつだん こう
大江広元は実朝を諫めて、「別段に功もないのに高い官位を望むのはよろしくありません。なるべく征
夷大將軍の外は一切の官をお辞しになったがよろしゅうございましょう」といふと、実朝は、自分もそれ
を知っているが、源氏の正統は自分の1代で尽きるであろうと思うから、せめて自分が高位高官にのぼっ
て、家の名誉にしようと思うのだ、といふて、さびしそうにしていた。ひろもと
が出来ずに、黙って退いたという事があります。

右大臣^{はいが}拝賀^{はいが}の式

実朝^{さねとも}の官位は、その後も進んで、27才の正月には権大納言^{ごん}、2月には左近衛大将^{さこんえの}、10月には内大臣^{ない}に任ぜられて、12月には右大臣^うになった。でその翌年^{よくねん}、即ち建保7年正月27日の午後8時ごろに、彼は鶴岡八幡宮^{つるがおかはちまんぐう}で右大臣^{はいが}拝賀^あの式を挙げる事にきめた。その時、大江広元^{おおえひろもと}は、「夜の御参詣^{さんけい}は無用心^{ぶようじん}ですから、昼になされたらいかがですか？」とって諫めたが、拝賀^{はいが}の式は夜行^{いさ}うことに決まっているという者があつたので、実朝^{さねとも}は時刻^{じこく}を変えようとはしなかった。

と、広元^{ひろもと}は、「わたしはこの年になるまで、ついで涙^{なみだ}をこぼしたことはありません。今日^{ごぜん}、御前^{まい}に参ると、しきりに涙^{なみだ}が出ますのは、ただごととは思われません。何か仔細^{しさい}のある事かと存じます。ご装束^{しょうぞく}の下に鎧^{よろい}を着ておいでなさいませ」といったが、これも、大臣大将^{しんたい}に昇る人が鎧^{よろい}を着るといふ例は昔からない、という者があつたので用いられなかった。

いよいよ出かける時になって、家来^{さねとも}が実朝^{さねとも}の鬢^{びん}を搔^かきつけに来ると、実朝^{さねとも}は自らの毛^ぬを1本抜いて、これを記念^{きねん}にせよとってその者に与えた上に、庭先^{にわさき}の梅^{うめ}を見て、

出^{ぬし}ていなば主^{やど}なき宿^{しゆく}となりぬとも
軒端^{のきば}の梅^{うめ}よ春^{はる}をわするな

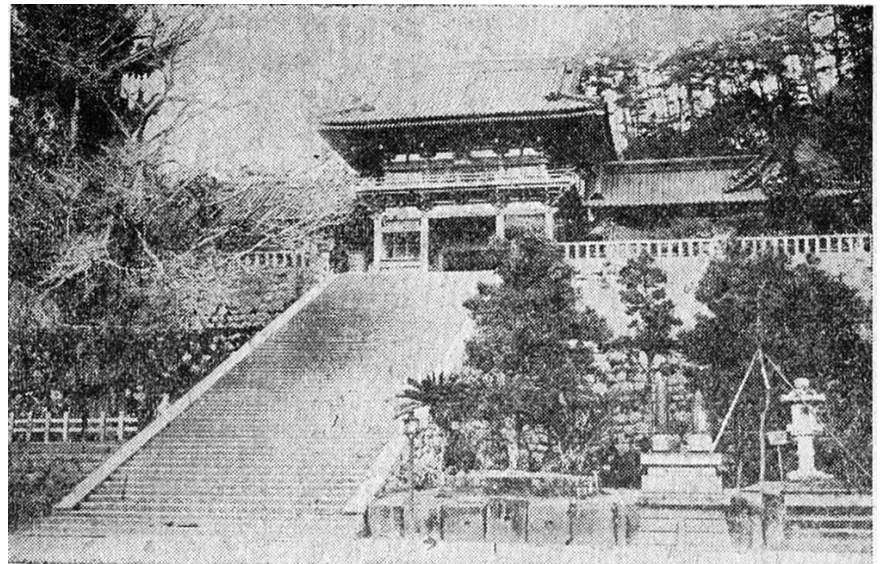
という歌^{うた}を詠^よんだ。「自分^{しゅじん}が出^でていけば、主人^{しゅじん}のない家^{いへ}になるかも知れないが、軒端^{のきば}の梅^{うめ}よ春^{はる}になったら忘れずに花^{はな}を咲^さかせよ」という意味^{いみ}です。それやこれやを考^{かんが}え合わせると、実朝^{さねとも}は既^{すで}に死^しを覚^さ悟^ごしていたのかとも思^{おも}われる。

やがて時刻^{じこく}になると、実朝^{さねとも}は車^{くるま}に乗^{のり}って家^{いへ}を出^でて、非常^{ひび}に美^{うつく}しい行^{ゆき}列^{りゃく}で鶴岡八幡宮^{つるがおかはちまんぐう}に向^{むか}った。車^{くるま}が南門^{みなみもん}を通^{とほ}る時に、鳩^{はと}がいつになく変^かな声^{こゑ}で頻^{しき}りに鳴^な騒^{さわ}いだり、楼門^{ろうもん}の前^{まへ}で彼^{かれ}が車^{くるま}を下^{くだ}りる時に、腰^{こし}に差^さしていた劔^{つるぎ}の柄^{つか}が車^{くるま}の手形^{てがた}という所^{ところ}に入^いってぼきりと折^おれたり、まだその他^{ふきつ}にも不吉^{ふきち}な事^{こと}が続^{つづ}いて起こったが、今更^{いまさら}、そんな事^{こと}に頓^{とん}着^{ちやく}しているわけには行^いかなかつた。

それで、予定^{よてい}の通^{とほ}りに進^{すす}んで行^いくと、門^{かど}を入^いったところで、実朝^{さねとも}の劔^{つるぎ}を持^もつてお供^{とも}をしようしている北條義時^{きたじょうよしとき}は、俄^{にわ}かに気^き分^{ぶん}が悪^{わる}くなつたといつて、その役^{やく}を他^{ほか}の者^{もの}に代^かわらせて自分^{自分}は家^{いへ}に帰^{かえ}つた。

あんや しらは
暗夜の白刃

さて実朝が拝賀の式をすませて
帰りに向った頃は、既に夜も更けた上
に、折からちらちらと雪が降出して、
あたりはぼおとしていた。彼が石
段の中程まで下りて来ると、ふと、
傍らの銀杏の樹の蔭から躍り出し
た者があったが、実朝のそばへ寄る
と思うと、いきなり刀を揮って斬りつ
けた。



鎌倉 鶴岡八幡宮
(石段の脇の注連縄を張り巡らせてある木が大銀杏
訳注：2010年に倒伏した)

実朝は笏で一度は受止めたが、
二の太刀で脆くも斬倒された。

ぱっと赤い血が雪の上に迸る。曲者は直ぐに実朝の首を取ろうとしたので、剣を持ってお供していた者が驚いて防ごうとすると、その者をも一刀の下に斬倒して、実朝の首を取って逃げた。

べっとうくぎょう
別当公暁

忽ち大騒ぎとなつて、門前に控えていた多くの武士が駆付けたが、既に曲者はどこにか姿を晦まして分からない。そのうちに、曲者は八幡宮の別当の公暁だという事が分かって、その搜索の手配を始めると、彼は三浦義村の邸へ行こうとして、その途中で、義時の命を受けた義村に騙されて殺された。時に年は19才でした。

しかし、一体、公暁とは何者か？ 何のために実朝を殺したのか？

公暁は実朝の兄の頼家の子で、一幡とは腹違いの弟です。父が殺された時には僅かに4才でしたが、その後、祖母の政子の指図で坊さんとなり、一時は近江の三井寺にいたが、後にまた、政子の命に依つて、鶴岡八幡宮の別当になっていたのです。

だれ くぎょう きょうさ
誰が公暁を教唆したか

誰にかそそのかされて、父が殺されたのは実朝の為であると思ひ込んで、折あれば敵を討とうと狙っていたのです。彼は実朝を討ちさえすれば、実朝には子がなく、外には源氏の後を継ぐ者がいないので、当然、自分が将軍になれるものと信じていたのです。それにしても、彼をそそのかして実朝を親の敵と思うようにしたのは誰だったのでしょうか？ 確かには分かりませんが、前後の事情から推察すると、拝賀の日に劔を持つ役を他人に代わらせて中途から家に帰った北條義時であろう、と世には伝えられています。

けっとう た
源氏の血統絶える

第21話 武家政治の始

かくして実朝が28才で甥の公暁に殺されると、公暁も既に殺されてしまったので、源氏の血統は全く絶えた。実に頼朝が将軍になってから僅か3代、28年で源氏は亡びたのであります。いかに当時は戦乱の後を承けて、殺伐の世であったとはいえ、頼朝の子も孫も悉く人手にかかって殺されたのは余りにも悲惨でしたので、世人はこれを指して、頼朝がその弟や近臣を殺した因果が報いたのだという風に考えた。しかし、中には更に遡って、頼朝の父の義朝が、父の為義を殺したので、その報いが頼朝の兄弟や子孫にまで及んだという風に考えた者もいました。

とにもかくにも斯うして源氏は儂く亡びてしまったが、鎌倉幕府はなお100余年の後まで続いた。執権の北條氏が表面に名ばかりの将軍を立てて、実際の政治を執ったのであります。

(第22話 源氏の滅亡 終わり)